

# 氷室

宮増作

季は	地は	ツレ	後	前
六月	山城	シテ	天女	ワキ 官人
		氷室守の神	氷室守の翁	氷室守の男

「八洲も同じ大君の。く。御影の春ぞ長閑けき。

詞 「そもそも是は龜山の院に仕へ奉る臣下なり。我此

度丹後の国九世の戸に参り。既に下向道なれば。

是より若狭路にかかり。津田の入江青羽後瀬の山々  
をも一見し。それより都に帰らばやと存じ候。

道行

「花の名の。白玉椿八千世経て。く。緑にかへる  
空なれや。春の後瀬の山続く。青葉の木陰分け過  
ぎて。雲路の末の程もなく。都に近き丹波路や。

氷室山にも着きにけり。く。

詞

「急ぎ候ふ程に。丹波の国氷室山に着きて候。此所  
の人を待ち。氷室の謂をも委しく尋ねばやと存じ  
候。

シテ、ツレ一声

「氷室守。春も末なる山陰や。花の雪をも集むらん。

ツレ 「深山に立てる松陰や。

二入 「冬の気色を残すらん。

シテサシ

「夫れ一花開けぬれば天下は皆春なれども。松は常

盤の色添へて。

二人 「緑に続く氷室山の。谷風はまだ音さえて。氷に残る水音の。雨も静に雪落ちて。実に豊年を見する御世の。御調の道も直なるべし。

歌  
「国土豊に榮ゆくや。千年の山も近かりき。変はらぬや。氷室の山の深緑。く。春の氣色は有りながら。此谷陰は去年のまゝ。深冬の雪を集め置き。霜の翁の年々に。氷室の御調守るなり。く。

ワキ詞  
「如何に是なる老人に尋ぬべき事の候。

シテ詞  
「此方の事にて候ふか何事を御尋ね候ふぞ。

ワキ  
「御事は此の氷室守にて有るか。

シテ  
「さん候ふ氷室守にて候。

ワキ  
「さても年々に捧ぐる氷の物の供御。拝みは奉れども在所を見る事は今始めなり。さてくく如何なる構により。春夏まで氷の消えざる謂委しく申し候へ。

シテ

「昔御狩の広野に。一村の森の下庵ありしに。頃は水無月半なるに。寒風御衣の袂に移りて。さながら冬野の御幸の如し。怪しみ給ひ御覽すれば。一人の老翁雪氷を屋の内にたゞへたり。彼翁申すやう。夫れ仙家には紫雪紅雪とて薬の雪あり。翁も此くの如しとて。氷を供御に備へしより。氷の物の供御始まりて候。

ワキ

「謂を聞けば面白や。さてく氷室の在所々々。上

代よりも国々に。あまた替はりて有りしよなふ。

シテ詞

「先は仁徳天皇の御宇に。大和の国鬪鷄の氷室より。供へ初めにし氷の物なり。

ツレ  
「又其後は山陰の。雪も霰もさえ続く。便りの風を松が崎。

シテ詞

「北山陰も氷室なりしを。  
ツレ  
「又此国に所を移して。深谷もさえけく谷風寒氣も。

シテ  
「便ありとて今まで。

二人 「末代長久の氷の供御の為め。丹波の国桑田の郡に。  
氷室を定め申すなり。

ワキ  
「実にく翁の申す如く。山も所も木深き蔭の。日  
影もさゝぬ深谷なれば。春夏までも雪氷の。消え  
ぬも又は理なり。

シテ詞  
「いや所によりて氷の消えぬと承るは。君の威光も  
無きに似たり。

ワキ  
「唯よの常の雪氷は。

シテ  
「一夜の間にも年越ゆれば。

ワキ  
「春立つ風には消ゆる物を。

シテ  
「されば歌にも。

ワキ  
「貫之が。

地  
「袖ひぢて。結びし水の氷れるを。く。春立つ  
今日の。風や解くらんとよみたれば。夜の間に  
来る春にだに。氷は消ゆる習なり。ましてや春

過ぎ夏たけて。早水無月になるまでも。消えぬ  
雪の薄氷。供御の力にあらでは。如何でか残る  
雪ならん。く。

地クリ  
「夫れ天地人の三才にも。君を以て主とし。山海万

物の出生。即ち王地の恩徳なり。

シテサシ  
「皇団長く堅く。帝道遙に盛なり。

地  
「仏日光りますくにして。法輪常に転ぜり。

シテ  
「陽徳折を違へずして。

地  
「雨露霜雪の時を得たり。

クセ  
「夏の日に。なるまで消えぬ冬氷。春立つ風やよぎ  
て吹くらん。實に妙なれや。万物時に有りながら。

君の恵の色添へて。都の外の北山に。つぐや葉山  
の枝茂み。此面彼面の下水に。集むる雪の氷室山。

土も木も大君の。御陰にいかで洩るべき。實に我  
ながら身の業の。浮世の数に有りながら。御調に  
も取り別きて。猶天照らす氷の物や。他にも異な

る捧物。叡感以て甚しき。玉体を拝するも。深

雪を運ぶ故とかや。

シテ  
「然れば年立つ初春の。

地 「初子の今日の玉箒。手に取るからにゅらぐ玉の。翁さびたる山陰の。去年のまゝにて降り続く。雪のしづりをかき集めて。木の下水にかき入れて。氷を重ね雪を積みて。待ち居れば春過ぎて。はや夏山になりぬれば。いとゞ氷室の構して。立ち去

る事も夏陰の。水にも住める氷室守。夏衣なれども。袖さゆる氣色なりけり。

ロング地  
「實に妙なりや氷の物の。く。御調の道も直にあ  
る。都にいざや帰らん。

シテ  
「暫く待たせ給ふべし。とても山路の御序に。今宵の氷の御調。供ふる祭御覽ぜよ。

地 「そもそもや氷調の祭とは。如何なる事にあるやらん。

シテ  
「人こそ知らね此山の。山神木神の。氷室を守護し

奉り。毎夜に神事有るなりと。

地「言ひもあへねば山くれて。寒風松声に声立て。時  
ならぬ雪は降り落ち。山河草木おしなべて。氷を  
敷きて瑠璃壇に。なると思へば氷室守の。薄氷を  
踏むと見えて。室の内に入りにけり。氷室の内に  
入りにけり。(中入)

地「樂に引かれて古鳥蘇の。舞の袖こそゆるぐなれ。  
天女「変はらぬや。氷室の山の深緑。

地「雪を廻らす舞の袖かな。

後ジテ「曇りなき。御世の光りも天照らす。氷室の御調供  
ふなり。

地「供へよやく。さも潔き水底の砂。

シテ「長じては又巖の陰より。

地「山河も震動し天地も動きて。寒風しきりに肝をつゞ  
めて。紅蓮大紅蓮の。氷を戴く氷室の神体。さ  
え耀きてぞ顕はれたる。

シテ  
「谷風水辺さえ氷りて。

地  
「谷風水辺さえ氷りて。

シテ  
「月も燿く氷の面。

地  
「万境をうつす鏡の如く。

シテ  
「清嵐梢を吹き払つて。

地  
「陰も木深き谷の戸に。

シテ  
「雪はしぶき。

地  
「霰は横ぎりて。岩もる水もさざれ石の。深井の氷

に閉ぢ付けらるゝを。引き放し引き放し。浮び出でたる氷室の神風。あら寒や冷やかや。

シテ  
「賢き君の御調なれや。

地  
「賢き君の御調なれや。波を治むるも氷。水を静むるも氷の。日に添へ月に行き。年を待ちたる氷の物の供へ。供へ給へや供へ給へと采女の舞の。雪を廻らす小忌衣の。袂に添へて薄氷を。碎くな碎くな。解かすな解かすなと氷室の神は。氷を守護し

日影を隔て。寒水をそゝぎ清風を吹かして。花の  
都へ雪を分け。雲を凌ぎて北山の。すはや都も見  
えたり見えたり。急げや急げ氷の物を。供ふる所  
も愛宕の郡。捧ぐる供御も日の本の君に。御調物  
こそめでたけれ。